

元旦礼拝

新年あけましておめでとうございます。

今年もどうぞよろしく願いいたします。

お隣り、前後ろの方々にも、ちょっとこう挨拶いたしましょうか。

はい、では、賛美を共に献げていきましょう。

聖歌 584 です。

「愛は人を育てます」

コリント人への手紙第一 8 : 1 - 3

ペテロの手紙第一 4 : 8

January.1.2022

コリント人への手紙第一 8 : 1 - 3

ペテロの手紙第一 4 : 8 (パウロ)

Preface

今年 2022 年の主題聖句は、壁に書けられている第一コリント 8 : 1 - 3 の御言葉と第一ペテロ 4 : 8 の御言葉を合わせたものと致しました。

一度、皆で声に出して読んでみましょう。

(オンラインの方々は、画面に出る御言葉を読んでみてください。)

「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。愛は多くの罪を覆います。
だから何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。」(パウロ)

使徒パウロの書いた第一コリントか、使徒ペテロが書いた第一ペテロか、始めはどちらか一つと思ったのですが、この二つの御言葉が、どうしても互いに重なり合って、どちらかを切ることが出来ずに、重ね合わせ連ねることと致しました。

第一コリントのパウロが言う「愛は人を育てます」という言葉の真意と、ペテロの手紙のペテロが言う「愛は多くの罪をおおうからです」という言葉の真意が同じように感じ、また同じことを違う言葉で表現しているものを合わせたら、より御言葉の真意が明確になると思われた次第です。

そして、この二つの「愛は人を育てます」「愛は多くの罪をおおうからです」という御言葉を合わせるだけでも十分なのですが、その対極にある「知識は人を高ぶらせ」という言葉を抜いてしまったら、見たくはないけれどもしっかりと見なければならぬものに覆いをかぶせてしまい、私たちの現実の姿から目を反らすことになりかねないと思い、使徒パウロの述べる通りに、「知識は人を高ぶらせ」という言葉を入れました。

さらに、「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。愛は多くの罪をおおいます」という事実を語った先に、この事実をもとにした私たちの行いが伴うことの必要性をペテロが語っていますので、「だから何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい」というペテロの言葉を入れて、御言葉が教える事実のみに留まるのではなく、その御言葉を生きることへと導かれたいたいと思い、このような主題聖句となりました。

この少し長めの主題聖句の言いたいこと、真意は、他者に対する愛ある配慮と、愛ある赦しと、愛ある受容です。

Part One

唐突かもしれませんが、皆さんは、この御言葉をご覧になって何を感じますでしょうか？

2022年の主題聖句を考えるにあたって、私自身本当に悩みました。

まあ、毎年悩むのですが、今年の年間テーマ聖句は、最後の最後まで、逃げたくなるほどに悩みました。

決めてからも、「2022年は主題聖句なしでいこうか、または、2021年の主題聖句を継続しようか」なんてことまでも考えました。

と言いますのも、「この御言葉を1年間礼拝堂に掲げ、テーマソングを歌っていくことが、もしかしたら負担に感じる人はいないだろうか？」

または、『「いやいや、言ってることは分かるけれども、そんなん出来ません」という諦めの思いを与えてしまうのではないだろうか？』

さらには、「この御言葉が私自身の生活の中に見られず、自分で自分の首を絞めることになるのではないだろうか？」

または、『「教会というところは、人の知性を否定するのか？！ 罪や悪行の隠蔽を勧めているのか？！」なんていう誤解を生みはしないだろうか？」というような心配が、心を離れませんでした。

私が主任牧師になってからのこれまでの3つの主題聖句は、どれも、「聖霊」、「わたし」、「神」という神様ご自身を表す言葉が入っており、イエス様が直接話しかける言葉だったり、主なる神様のなさるわざについてだったり、「神様とはこういうお方です」という意味合いの聖句でした。

ところが、今年の主題聖句は、「神様はこういうお方です」というよりも、その次の段階「神様はこういうお方ですから、そのお方を信じている私たちはこうすべきですし、こうすることを神様から期待されていますし、これをするをもつて、クリスチャンがクリスチャンであることが明らかになります」というような私たちの行い・actionに重きが置かれている御言葉です。

「御言葉を行う人になりなさい」とか、「行いのない信仰は死んでいるのです」と、イエス様の弟であったヤコブがヤコブの手紙で言っていますが、このヤコブの手紙を、宗教改革を起こしたマルチン・ルターは、「神の恵みによる救いではなく、人の行いを強調しすぎているから、聖書66巻から外しても構わないぐらいだ」とこき下ろしたり、「藁くずの書簡」と言ったりして、ヤコブの手紙をとて嫌いました。

まあ、これは、ルターのトラウマで、修道僧として厳しい鍛錬や修行によっては一切平安も救いの確信も得られなかったという自らの経験が作用して生じた間違い、ご解釈ではありましたが、「この主題聖句が礼拝堂の壁に1年間掛けられることによって、それに近い感情やまたは重荷や煩わしさを感じさせてしまうことにならないだろうか」という心配・憂慮が心の内を目まぐるしく飛び交いました。

所謂、サタンの攻撃もあつたのかなあとも思います。

ですが、やっぱり、どうしてもこの御言葉が心から離れず、今の私たちに求められている神様からの語り掛けだと思えて仕方ありませんでした。

結局、聖書のどこを呼んでも、ちょっと TVCM っぽくなってしまいますが、「そこに愛はあるんかい？」と語り掛けてきます。

モーセ五書も、預言書も、歴史書も、詩歌書も、福音書も、パウロの手紙も、ヨハネの手紙も、黙示録も、聖書のどこもかしこも、「そこに愛はあるんかい？」と語り掛けてきます。

私が初めて神学校に入学する3日ほど前に、大学の神学部の先生をしている大分年上の従弟と食事をしたことがあるのですが、その食事中の会話の中で、その従弟が私にこんなことを言って教えてくれました。

「豊和、モーセ五書は、全部神様の愛なんだよ。」

今から21年前のことです。

その時は、何のことやら、何の話やら、さっぱり分かりませんでした。

でも今は、「豊和、モーセ五書は、全部神様の愛なんだよ」といったその言葉に、諸手を挙げて賛同できます。

モーセ五書だけでなく、聖書のどこも、神様の愛とご配慮が詰め込まれていることを、今なら曲がりなりにも感じる事が出来ます。

そして、僕が、私が、私たちが、イエス様に神様に愛されている愛があるのは当然のことですが、「神様に愛されていることだけに満足していて、僕が、私が、私たちが、あの人を、この人を、この家族を、この兄弟姉妹を、このキリストの家族を本当に愛していますか？」と問われている気がして仕方ありません。

正月早々、いつにもまして暑苦しいことを言っていて申し訳ないのですが、で

もこれは、私の言葉ではなく、イエス様の、神様の、聖霊様の私たちに対する語り掛けのように思えて仕方がないのです。

Part Two

実際にイエス様は、2000年以上かけて書かれた聖書66巻をたった二言、「心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして神を愛しなさい」、また「隣人をあなた自身のように愛しなさい」と、この分厚い聖書を私たち側の愛の行いにまとめなさいました。

「神とはこういうお方です」という神様のご性質や品性を紹介する言葉をもって聖書を要約するのではなく、私たち側の行い・action、愛の行いをもって聖書を要約されました。

つまり聖書は、「神に愛されていることを自覚出来るようになって、はい終わり！」とは言わず、「愛されているという事実をもとに、あなたはどうか生きていますか？ あなたの人生に愛はなされていますか？ 愛することがあなたの人生の、信仰の目的になっていますか？」と問いかけてきます。

そして、その愛は、エロスや恋愛の愛ではありません。

誇ることもなければ、見返りも期待せず、自分が馬鹿を見、傷つくこともある愛です。

要するにイエス様の愛ですね。

私たちは、持ち合わせていない愛です。

ルカの福音書を見ますと、先ほど言いましたように、イエス様が、「神を愛し人を愛す action を起こすことが、聖書の言いたいことです」とまとめなされたその直後に、強盗に襲われた人を助けたサマリア人の話をされます。

強盗に襲われて、着ている物まではぎとられ、虫の息になっている人を、ユダヤ人からこけにされていた通りすがりのサマリア人がその人を助け、治療をしてあげ、宿屋に宿代金+αまで支払って「足りない分があれば、後日請求してくれれば払う」と言って、名も名乗らずに立ち去ったという話です。

でも、もしこのサマリア人が、体調が回復したその強盗に襲われた人に対して、いい人を装うために宿屋の主人には内緒で、「立て替えておいた代金+利子とサービス料もしっかりとつけて、お返してください」と言ったならば、それは愛ではなく、ただの姑息な営利活動です。

愛ではありません。

良いことはしても、決して損はしたくない。

馬鹿にされるのも勘弁だし、相手に負けるのも、下手に見られるのはなおさら、

偽善者だと思われるのも嫌だというならば、それは、もはや愛ではありません。

でも、サマリア人が為した愛は、誇ることもなければ、見返りも期待せず、自分が馬鹿を見、損をしただけです。

でも、そこには愛がありました。

このサマリア人の話をされた後、イエス様は、「感動するいい話だったでしょ？」と、一つの正しい愛の知識を教えてあげたことで終わりとはせず、「あなたも行って、同じようにしなさい」と仰いました。

イエス様がなぜ、このサマリア人の話をされたのか？

私たちがサマリア人のように出来ていないことを責めるためでしょうか？

私たちに正しい愛の教理を教え、聖書の知識を蓄えさせるためでしょうか？

違います。

知ったならば、行うようにするためです。

知るだけでは、私たち高ぶって終わってしまいます。

知識を蓄えるだけでは、愛にはなりません。

イエス様がサマリア人の話をされた最大の理由は、何よりも、イエス様ご自身が、このサマリア人のような愛に満ちておられた究極のサマリア人であられたからです。

そして、そんなイエス様を慕い、イエス様を愛し、イエス様を喜び、イエス様を信じ、イエス様を感謝している私たちに、それが愛であることを悟り、愛を行えるようにするためにイエス様はこのサマリア人の話をされました。

今、世界に必要なのは、この愛です。

この愛がないんです。

この愛がないことが、根本的な問題です。

でも、先ほど話しましたように、こんな愛を私たちは持ち合わせておりません。

Part Three

少し話が変わりますが、「真理はあなた方を自由にする」という有名なヨハネの福音書の言葉がありますが、真理であられるイエス・キリストを信じるならば、私たちは自由になります。自由です。

どんなものも、私たちを縛り付けておくことは出来ません。

どんな束縛も、私たちの魂を押さえつけておくことは出来ません。

「イエス様を信じたために、私はすべてのことにあって自由だ」と言うならばそれも間違っていないし、合っています。大正解です。

私たちは、イエス・キリストにあつて自由を得ました。

私たちに自由をお与えくださるために、イエス様自ら十字架に架かって死んで行かれました。

そのため、どんなものも、私たちに与えられたキリストの贖いによる自由を奪うことは出来ません。

これこそ、聖書が私たちに教える大切な教理です。

ガラテヤ人への手紙 5：1 (パウロ)

この御言葉は事実です。

真実です。

私たちに自由を得させるために、あらゆる束縛から解放してくださるために、キリストはことを成してくださいました。

さらに、せっかく与えられたその自由を奪われ、再び奴隷のくびきを負わないようにと警告までしています。

じゃ、その自由を奪われ、奴隷のくびきを再び負わないためには、どうすればいいのか？

13節の言葉に繋がります。

ガラテヤ人への手紙 5：13 (パウロ)

与えられた自由を奪われ、再び奴隷のくびきを負わないようにするには、愛をもって互いに仕え合うことです。

ここで言う「愛をもって、互いに仕え合いなさい」という日本語訳は意識で、ちょっとこう水で希釈したような訳となっています。

直訳は、「愛をもって、互いに奴隷のように仕え合いなさい」という訳になります。

つまり、与えられた自由を奪われ、再び奴隷のくびきを負わないために、愛をもって互いに奴隷のように仕え合うのです。

自由だと言っておきながら、「愛をもって、相手の奴隷になりなさい」言います。

奴隷にならないために、奴隷になるのです。

でも、この二つの奴隷には大きな違いがあります。

一方の奴隷には愛が伴いませんが、一方の奴隷には愛が伴います。

ローマ書6章を見ますと、「私たちは罪の奴隷から解放されて、義の奴隷とな

り、神の奴隷をなりました」とあります。

聖書は、あたかも矛盾しているかのようなことを一貫して言い続けますが、決して矛盾しておりません。

キリストを信じてもお、奴隷であることに変わりはありませんが、義の奴隷であり、神の奴隷です。

罪の奴隷、悪の奴隷ではありません。

罪の奴隷は、そのものずばり奴隷です。

平安もなければ、自由も感じず、束縛の中、心を魂を廃れさせますが、義の奴隷、神の奴隷は、奴隷に徹すれば徹するほどに、平安があり、自由を謳歌し、心と魂に満たしを与えます。

そして、この義の奴隷の、神の奴隷の核は愛です。

愛をもって互いに奴隷のように仕え合うこと、これに、私たちキリスト者は、キリストがお与えくださった自由を保ち、謳歌し、満喫できます。

人は義の奴隷と、神の奴隷として生きる時に、自由を謳歌します。

他者を愛するために、その人に奴隷のように仕えた時、自由を満喫できます。

愛をもって、奴隷のように仕え合う時に、互いに自由を謳歌できます。

相手が先に自分の奴隷になることを待つのではなく、自分が先に相手の奴隷のように仕えた時に、キリストにある自由を実感します。

奴隷とは死を意味する言葉で、他者にあつて自分が死ぬことですが、私たちは誰一人として、先程のサマリア人のような愛を持ち合わせてはいませんし、誰一人として、他者を愛するために死ねません。

でも聖書は、私たちに、キリストのように人のために死ぬことを求め、その人のために死んだ時、自由を実感できると言います。

Part Four

私たちがキリストにあつて自由を得たというのは、自由気ままに勝手に生きるためではありません。

またもし、自由気ままに勝手に生きることが出来たとしても、やがて自然と自由を感じなくなるばかりか、束縛と何ものかの奴隷になっている気がしてなくなります。

大好きだという趣味や道楽でさえも、その奴隷になることがあります。

イエス様は、私たちが私たちの欲のままに、私がやりたいようにやり、やがて再び霊的自由を奪われるために十字架に架かれたわけではありません。

私たちがキリストにある自由を得たのは、最上のものを頂くために、享受する

ためにです。

神の民となる自由のためにです。

神の僕になる自由です。

イエス様と共に生きる自由です。

互いに奴隷のように仕え合い、赦し合い、愛し合う自由です。

やりたくないけれども、本当はやらなくてはならないことをやる自由です。

私が損することがあるにも関わらず、他者の益となるために、私が進んで快く従っていく自由です。

愛し、赦し、受容するために困難があっても、主イエス様と共に生きる自由。

これが、私たちが、イエス・キリストのうちに頂いた自由です。

魚は水の中でしか生きられません。

でも、その水は、魚を束縛しているわけではありません。

魚は水の中にあって自由に泳ぐことも出来ますし、思う存分呼吸することも出来ます。

ダイビングをなさったことのある方は体験したことがおありだと思いますが、水の中が不自由な人間が、水の中をほんの少しの間潜って泳いでいるだけでも、自由に空を浮遊しているかのような感覚を覚えるほどですから、魚にとってはなおのこと水は束縛ではなく、自由です。

水から出された、または飛び出てしまった魚は、自由どころか、息が出来ない身動きが出来ないという束縛の中で息絶えてしまいます。

魚は、水の中にいて初めて自由を謳歌するのです。

例えば、夫婦の間で自由に生きるとは、夫が妻を、妻が夫を騙し、夫婦の間にあってやってはならないことを自由にやり尽くすことではありません。

夫は妻に、妻は夫に、失敗することはあったとしても最後まで誠実に生きることが、夫婦間にあつての自由です。

夫婦間の自由をはき違えた瞬間、すべての自由を失い、その家庭は壊れてしまいます。

イザヤ書で、神を夫に、私たち人を妻に例えている箇所がありますが、人は、神の御言葉の中で、御言葉と共に、御言葉を生き、御言葉を行うことによって、自由を謳歌します。

最初の人アダムとエバは、神の言葉に背いたその時から、自由を失いました。

そして、その神の言葉の核、髄、心臓部、軸が、愛をもって互いに奴隷のように仕え合うことです。

そこにこそ、人が体験できる最大の、唯一の自由があります。

ガラテヤ人への手紙 5 : 14 - 15 (パウロ)

イエス様が、「神を愛し、人を愛す」という二言をもって、聖書をまとめなさいましたが、このガラテヤ人への手紙ではもっとその先を行います。

「神を愛し」という言葉は、「他者を自分のように愛す」という言葉に溶け込ませて、二言ではなく、一言にまとめてしまいます。

「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」

これが、聖書の要約であり、エキスだと言います。

神との関係は、人との関係に表れると言わんばかりです。

そして、もし、これが出来ないならば、互いが互いを滅ぼし合うことになると言います。

でも、先程から何度も言っていますが、問題は、私たちの力では愛をもって奴隷のように、互いに愛し合い、仕え合うことが出来ないということです。

ところが、ちゃんとその方法も教えてくれています。

ガラテヤ人への手紙 5 : 16 - 17 (パウロ)

私たちには出来ない、愛をもって奴隷のように仕え合うということを、御霊なる神様が、私たちの内におられる聖霊なる神様がしてくださると言います。

じゃ、他力本願なのか？

それも違います。

私たちは、「御霊によって歩みなさい」という命令通り、神様から、主イエス様から目を離さないで、神様がどういうお方であるのかを、イエス様がどういうお方であるのかを知り続けることを諦めないのです。

イスラエルの民たちが、朝晩欠かさず子羊をささげるよう命じられていたように、昼も夜も御言葉を反芻するよう命じられていたように、

私たちの内に住んでいてくださり、同行してくださっている神様、イエス様の御旨が何なのかを探り、神様、イエス様がどういうお方なのかを知り続けるよう命じられています。

私たちは、神様を、イエス様を、聖霊様を知っただけ、愛せ、赦せ、受容できます。

私たちは、神様を、イエス様を、聖霊様を知っただけ、謙遜になれます。

私たちは、神様を、イエス様を、聖霊様を知っただけ、奴隷のように仕え合うことが出来ます。

私たちの力や徳で、愛し、赦し、受容し、謙遜になり、奴隷のように仕え合う

のではありません。

神様を、イエス様を、聖霊様を慕い求めることによって、私が願っていることではなく、神が願っておられる愛に生きることによって自由を満喫します。

逆に、私たちは、自分のことを見、自分から目を離さず、自分に焦点を当てれば当てるほど、愛せず、赦せず、受容できません。

自分のことを見、自分から目を離さず、自分に焦点を絞れば絞るほど、驕り、高ぶります。

自分のことを見、自分から目を離さず、自分に注目すればするほど、人を奴隷のように扱い、扱いたくなります。

私たちの力や徳で、愛そうとし、赦そうとし、受容しようとするほど、自分自身を束縛し、くびきを負っていくことになります。

愛し合いましょう、愛を実践しましょう、愛なる人になりましょうと、互いに愛をもって仕え合うために、互いに説得し、説教し、強調し、注意して、慈善活動を行い、たくさんの良いと思われることをしたならば、そこに愛が成るのかと言うと、むしろすぐに疲弊してしまうでしょう。

もし、愛ある良いことを出来たとしても、それを誇りたい気持ちが出て来て、驕り、高ぶり、互いに見せたがるようになって長続きもしません。

もう出来ないと、ダメだと、放棄して終わってしまいます。

じゃ、どうすればいいのか？

ただ一つの道しかありません。

私たちの視線をイエス様に合わせ、イエス様から目を離さず、イエス様のことを知り、イエス様と人格的に出会い、真にイエス様と一つになることです。

頭だけでイエス様を知るのではなく、身をもってイエス様を知り、一体とならせていただくのです。

それが御霊によって歩むことであります。 また、パウロはこうも言います。

ガラテヤ人への手紙 2：19－20（パウロ）

「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」

「私は死に、キリストが私のうちに生きておられる」

使徒パウロが実感した信仰的事実です。

イエス様から目を離さず、イエス様のことを知り、イエス様と人格的に出会い、真にイエス様と一つになったら、私は死に、キリストが私のうちに生きておられることを実感しました。

「人を愛するために、私は死んでいいんだ」と、私が死ぬほどに、キリストが生きていることを知り、生かされていることを満喫できると告白します。

キリストゆえに死ねるんです。

それが生きることに、愛することに繋がります。

キリストが我が内に生きておられること、私が死にキリストが生きておられる、これが、互いに熱心に愛し合う秘訣です。

Conclusion

奴隷は死を意味しますが、愛によって奴隷のように仕え合うことに、生き生きとしたキリストの命が溢れます。

自由があります。 実りがあります。 その愛が人を育てます。

罪の奴隷は滅びで終わりますが、義の奴隷には実りが伴います。

キリストが我が内に生きておられることを実感し、自由を謳歌し、愛をもって互いに仕えるという実りが、自然と実っていきます。

だから、大いに自分に死にましょう。

私たちに足りないのは、知識でもなく、徳でもなく、力でもなく、イエス様と同じように死に、イエス様が私たちの内に生きておられるというイエス様との一体感です。

2022年の1月1日から始まる私たちの人生に、この主題聖句のように、互いに熱心に愛し合う時にもたらされる実りがもたらされますよう祈っていきたいと思います。

お祈りいたしましょう。